

人間を撮る ドキュメンタリー映画はこうしてつくられる

池 谷 薫

池谷薫氏 略歴

東京都生まれ。一九八二年に同志社大学文学部美学・美術史学専攻を卒業。TBS、NHKなどで多くのテレビ・ドキュメンタリーを制作し、とくに中国に関する作品が多いのが特徴である。

代表作としては『延安の娘』、『蟻の兵隊』などが挙げられる。長編ドキュメンタリー映画『延安の娘』は、NHKでは十数回放送されている。ベルリン国際映画祭など世界三十数カ国の映画祭でも絶賛された。

二〇〇九年には、『人間を撮る』という書籍で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した。『延安の娘』の歴史の舞台は、黄土高原の延安、そして遠く離れた北京である。「中国人の国難」とも言えるその信じ難い時代を体験したことのない、日本育ちの先生の見事な取り組みによって世界的な名作となった。

本講演は『延安の娘』（二〇〇二年）を上映後、行なわれた。

主人公ハイシア（海霞）のお父さん、娘と二七年ぶりに再会するというのに裸で出てきちゃいましたね。びっくりしたでしょ。僕もね、ちょっと悪い予感がしたんです。実はあのお父さん、いつも裸でいるんですよ。で、娘に会うときくらいは服着てくださいよって電話しようかと思った

の。だけどドキュメンタリーはそれやっちゃうとダメなんです。リアリティがなくなる。だから、黙ってた。そしてたら案の定、裸で現れて。僕、その場でしゃがみこんじゃいました。

ただね、その晩、ラッシュって僕ら言うんだけど、その

日撮ったテープを見てたらね、「あつ」と思ったんですよ。何かというとね、産婆さんが出てきてハイシアが産まれた時、お父さんが「始末してください」と言ったっていう場面があるでしょ。あれ直訳すると「オンドルに投げ入れてください」と言ってるんですよ。要するに産まれた痕跡すら残しちゃいけないわけですね。だから、あの再会のシーンは農村に産み捨てた娘が会いに来たんじゃなくて、殺そうとした娘が会いに来るといって、そういう修羅場だったんです。だから、たぶんお父さんは、いつもと同じような恰好でいようと自分に言い聞かせたんでしょ。そうじゃないと自分の気持ちごとくに飛んでっちゃうかわからなかった。再会のシーンの裏には、実はそういう人間の複雑な思いが隠されているんです。『延安の娘』はドキュメンタリーなんだけど劇映画みたいにドラマがいっぱいあるでしょ？でも、まだまだそんなのは氷山の一角で、水面下には膨大な人間のドラマが詰まっているんです。では、この『延安の娘』をなぜ僕が撮ろうとしたのかということからお話ししたいと思います。

実は、この『延安の娘』をやる前に僕は二十年ぐらい中国を舞台にドキュメンタリーを撮っているんです。テレビ番組ですけどね。僕はNHKスペシャルを十二本撮ってるんですけど、そのうちの九本が中国もの。一人っ子政策で

あるとか、農村の土地の競売騒動とか、それからニューヨークのチャイナタウンだったり、北京からモスクワへ中国人のプロカーが大量のダウンジャケットを売りさばきに行くって話だったり。とにかく中国にどっぷりはまったんですね。それはなぜかという、あの八九年に起きた天安門事件に影響されたからなんです。実は僕、現場で取材する予定だったんですよ。五月末に北京に入るビザも取った。けどちょっと学生の動きが止まったんでね。それで様子を見ちゃったんです。そしたら六月四日にあの弾圧が起きた。悔しくてね、眠れなかった。ちょうどあのころ衛星放送が始まって、NHKのBSで一晩中、生中継をやってたんです。血だらけになった市民が担架で運ばれていたりとかね。それを見て、悔しいやら情けないやら、そんな気持ちでいっぱいになりました。なんで俺はそこにいるんだと。僕ら取材する人間が現場にいないということ、何も見なかったことと同じですからね。何も語れないということ。でね、そのあと翌日になって戦車を止めた男がいましてね。なんか薄汚れたワイシャツ着て、紙袋さげで、戦車の前に立ちはだかった。もうこれ以上市内に侵入しないでくれと。あの姿見たときね、こんなに悲劇的なことが起きているのに、こんな勇氣を持った人がこの国にはいるのかと。それで僕は中国を、中国の庶民を撮りたいな

って思ったんです。市井の人を。だから天安門事件っていうのが強烈な原体験だったんですね。それを撮れなかったっていうことが、僕にとって中国を撮り始めるきっかけだったんです。

その後、年のうち三分の一ぐらい中国で取材した時期もあつたんですけど、やっていると必ず文革の話になるんですよ。どんな取材をしても文革の話が出てくる。ところがね、文革ってどんなだったんですかって聞くと、曖昧な笑顔を浮かべてスーッといなくなっちゃうんです。でね、これはよっぽどのが起きたんだなって思ったわけです。そうこうしているうちに、九三年に延安に初めて行きまして、その時は『黄土の民はいま』っていうNHKスペシャルの取材で、農民の土地の競売騒動っていうのがテーマだったんですけどね。その時に、『延安の娘』にも出てくる「老紅軍ろうこうぐん」の爺さん、映画の中でいつも麻雀やってるあのお爺ちゃんに出会ったんです。じゃ・ハイミンさんといって、あの長い顎鬚の人です。そしたら彼は僕らを見て、「お前らは外地から来た二組目だ」って言うんです。「あれ？じゃあ昔も取材されたことあるの？」って聞いたら、「いやそうじゃなくて、三十年くらい前に北京から若い兄ちゃん姉ちゃんがいっぱいきて、腐ったジャガイモ食って死にそうになって大変だった」って言うんです。あつ、下

放かと。延安にも若者たちが下放されていたんですね。まあ考えたら延安は革命の聖地だから、それも当然なんですよ。ね。そのあと爺さんはまた気になることを言ったんです。「あの当時は恋愛がご法度でな」って。「えっ、恋愛がご法度？一体どういうことだ」と頭が疑問符だらけになりました。

でも考えてみれば下放っていうのは長い修学旅行みたいなもんです。親元から切り離されてね。しかも、若者たちはみんな戸籍を農村に移されて送り込まれたわけです。だから勝手には帰ってこれなかった。そういう中で、親と引き離されて、慣れない農作業をやらされた。まあそのうちに慰め合うように若者同士がくっついて子どもができたりしたんだろうなって、なんとなく思ったんです。で、そこからハイシアのような境遇の子を探し始めたわけです。だから、ハイシアが見つかったこの映画撮ろうとしたわけじゃなく、そういう子を探すところから始めたんです。結局ハイシアが見つかるまでに七年かかりました。それも不思議な縁というか延安でね。

『延安の娘』っていうのは、文革を下半身で切り取ったというような奇妙な評価もされてて、なるほどと思うんですけど、ご覧になってわかるように、僕の関心は文革そのものにあるわけじゃなくて、文革という苦しみを背負った

人々がそこからどうやって再生するか、どうもがいて生きていくのかというところにあるんです。そこをやっぱり見たいんですね。僕は現在進行形で描きたいんです。すると、僕はこのハイシアっていう存在というのがパンドラの箱を開ける鍵のような、そういう存在になりそうだな、と思っただんですね。それでさっそくハイシアに会いに延安に行きました。ああ可愛い子だなと思いましたね。ただいっつなんだらうとも思った。小学生に見える時もあれば四十過ぎに見える時もあるしね。延安っていうのは紫外線がすごいですからね。目じりのところに何本も深いしわが刻まれている。まあ、それもいいなと思っただんですけど。

ところが、大変なことがその次に起こるわけです。僕ら外国のクルーが中国で取材撮影するっていうのは大変なんです。必ず監視役を兼ねた役人が同行するんですね。延安というのは革命の聖地ですからね、とりわけ厳しいんですよ。で、役人はハイシアを見て何と言ったかということ、「この子は知恵遅れだから取材はダメだ」と言っただけです。どこが知恵遅れなんですかねえ。つまりどういうことかと言えば、文革という中国現代史の闇を引きずった子が、よりによってとんでもなく貧しい農村で見つかった。それを外国のカメラ、それも日本のカメラに撮らせていいのかってことなんです。これは許すわけにはいかんということだ

ったんでしようね。さあ、困りました。僕はやっぱり諦めきれないわけですよ。ハイシアはとても魅力的だったから。で、何をやったかという、役人を替えるところからやりました。半年かかりましたけど。前に延安を取材した時の担当者、これがジャン・ジェンルーといってなかなかの大人なんですけど、彼を探し出して担当者になってもらった。彼は少し政府に都合の悪いところでも、それが真実なら撮らせてくれた。共産党の宣伝部の人間なので。よ。だから、組織じゃないんですね。やっぱり個人なんです。うれしいことに彼は出世してくれていたんで、彼に担当になってもらって。でも今度はこれを中央に認めさせなければいけない。それでまた三か月くらいかかりました。だからハイシアが見つかったから撮影にとりかかるまでに十か月くらいかかってしまったんですね。でもね、この時間がよかったのかもしれない。関係を深められた。ドキュメンタリーっていうのは何と言っても信頼関係をどう築くかなんですよ。カメラが入る前に何をやったかということ。実は、撮影前に延安に三回、北京にも同じ回数入ります。やることがいっぱいあったんですね。なによりハイシアが現れたのはいいけど、本当にハイシアが実の親に会いたがっているのか確かめなきゃならなかった。無理やり会わせるわけにはいかなかったですから。

そのことでいうと、実はハイシアはもう実際に探し始めていたんです。ところが農村の娘ですからね。何もできなかった。僕が「じゃあなんで行動に移さなかったの？」って聞いたたら、「都会に行ったら誘拐されると思っていて」って答えましたよ。人身売買まだありますから。中国ではね。ハイシアなんかそういう意味では恰好の餌食になりそうですね。ハイシアはなにかそういう意味では恰好の餌食になりそうですね。なにせ一四〇センチくらいしかないです。村から半径二〇キロくらいしかないんです。一番遠くまで行ったのが、彼女が子どもを産んだ病院。ハイシアはね、子ども産むとき大変だったらしいですよ。本当にもう難産で、最後は帝王切開するんだけど、その時に養母がやってきて、「誰の許しをえて腹を切ったのか」って言ったそうですね。手術の費用は誰が払うのかということですね。そのとき「なにをあんたは言うんだ」って怒ったのが、あの義理のお姉さん。ハイシアと一緒に北京に行くことになる人ですね。だからハイシアはあのお姉さんだけには気を許しているんです。

ちよっと話が前後するけど、ドキュメンタリーの裏話として面白いから披露しますが、ハイシアが北京に出かける直前に「私は養父母と縁を切っても北京へ行きたい」って

言いますよね。あれ実はね、インタビュしてるの僕じゃないんです。義理のお姉さんにやらせてるんです。実は最後までハイシアは僕らに本心をみせてくれなかった。だから姉と向き合わせ、それを長玉って言いますけど望遠レンズで撮ってるんです。それほど絶対に撮らなければいけない言葉だったんですね。ハイシアの何が何でも会いたいという意思がなければ、あのような感動的な再会はありません。いわけですから。ハイシアがその思いを持つては分かってるんです。だけど我々のカメラにはなかなか語ってくれないから、お姉さんに上手いこと聞き出してもらったんですね。それであの表情が撮れた。あの時ハイシアが「気にかけてくれる人がほしい」って言いますよね。あれは大事な言葉でね、あの「気にかけてほしい」という言葉、あれは『延安の娘』の全体を通してのキーワードなんです。お父さんのワン・ルーチョン（王露成）も、ホアン・ユーリン（黄玉嶺）も、みんなが自分のことを振り回してほしい、気にかけてほしい、そういう風に思っていたんですね。それを作品としてはハイシアの言葉で伝えたということになりますかね。そういうことでハイシアは北京に向かつていくんですが、実はそんなに簡単に北京行きが実現したわけじゃないんですよ。

僕、『延安の娘』を撮り終えるまでに中国のパトカーに

二回乗せられています。その一回目がね、ハイシアたちが北京に行く、まさにその日なんです。どういふことかと言いますと、北京に行く前の晩は僕らが泊まったホテルで壮行会をやったんですけど、そこにハイシアの舅も来てね、パイチュウって五〇度ぐらいあるやつをぐいぐい飲むんですよ。それで目がギンギンとしてきたの。これはちょっとまずいなと思って、悪い予感がしたんです。要するに、舅も行きかけたんですよ、北京に。でも、北京の父親のことを考えるとちよつと思つてね。遠慮してもらったんですよ。翌朝ちよつと胸騒ぎがしたんで、うんと早く起きてロビーで待つていたら、舅がハイシアの子ども、つまり孫ですね、それを抱いてスーッと出て行った。で、そのうしろ五メートルぐらいのところをハイシアがトコトコ付いて歩いて、三人で村へ帰るついでうんですよ。それ、出発する日ですよ。「えー！とにかくちよつと待つてくれ」ってやつね。ずつと歩きながら説得したんです。小雨が降るなかをね。舅とハイシアがトポトポトポ、村へ帰ろうとする。ここまでやつとたどり着いたのになんてこつたと思つたわけですよ。そしたら、僕が持つてた無線にカメラマンの福居さんの慌てた声が入ってきて、「池ちゃん、いま警察が踏み込んできたんだけど大丈夫かな」って言うんです。いったい何が起きたのかつていうと、その

舅がね、行きがけの駄賃よろしくで、警察に「孫を国際誘拐犯にさらわれる」って通報したらしいの。国際誘拐犯ですよ。僕ら……。まあそんな誤解はすぐに解けるんですけどね。これ、どういふことかと言いますとね、実は中国の農村事情をあらわしているんですよ。要するに舅は、ハイシアとその子どもを北京の親に取られると思つたんだね。だからその監視のためになんとか自分も行きたかつたんだけど、それも断られて、強行手段に訴えたわけです。なんといつてもハイシアは長男の嫁ですからね。その子ども、つまり大事な跡取り息子を取られると思つたわけ、舅は。ああそうか、そんなこと考えも及ばなかつたなあ、と反省して。もうちよつと礼を尽くして対応するべきだつたなあと思ひましたけどね。まあ、そんなことがあつたんです。

北京の再会にはまあそういつたドラマがあつたわけですけど、さて、この辺から俄然ホアン・ユーンという人が目立ってきますよね。みなさん、もうお分かりかと思ひますけど、実は『延安の娘』の本当の主人公は、このホアン・ユーンなんです。僕はこの人を描きたくつてね。簡単に言うとお惚れたんです。一度彼に「あんたを撮りたい」って言ったことがあるんですけど、そしたら「俺の何をだ？」と聞くから、「すべてを」と答えました。そのぐらい彼の人間性に惚れたんです。

彼は要するに、ああいう事情で延安に残ってたわけですけども、あの頃はまだ三〇〇人くらい残ってたんですよ。北京から行った下放青年が。その互助会みたいな組織作ってね、小麦粉かなんか差し入れに行ったりとか。そういうシーンあったでしょ？ ああいうことをしたりね。まあ実に男つ気があるというか。

彼は紅衛兵運動の時はリーダーでね。僕は編集で入れようかどうか迷ったんだけど、彼が文革について語るシーンがあるんですよ。薬品工場の幹部をね、殴る蹴るやって、そのあと梯子にくくりつけて、肋骨三本だか四本折ったっていう話だったんですけど、それをホアン・ユーリンはやってたんですよ。今でも思い出して吐き気がするって。だから彼は、やられた側の気持ちが変わるんですね。やった側とやられた側の両方の痛みをわかっている。彼の野太さは、そういうところから来ているんだなと。とにかくまあ彼を追っかけたかなと思っただけです。だから彼が登場することによって、『延安の娘』は二つの再会劇になるわけですよ。実は、こっちの再会劇の方が難しかったんです。北京の老幹部は出てくるいわれがないですからね。取材拒否すればいいわけですから。さあどうしようかなと思っただけ。

『延安の娘』にはキーパーソンがいるんです。この人が一番大切っていう人。それはチャオ・グオトン（趙国棟）

っていう夫婦。お父さんに「会ってやれよ、娘に。せっかく娘が会いに来るんだからさ」って余計なお世話をする人。実はこのチャオ・グオトン夫婦がものすごく大切な人たちなんです。

チャオ・グオトンさんっていうのは九〇年代の初めまで延安に残ってた人たちなんです。延安にはその当時まだ一万人ぐらい残っていたの。下放青年が。八〇年代半ばくらいまで。でね、私たちを北京に帰らせてくださいって国務院に陳情したんですよ。当時国務院に陳情するっていうのは自分の生命を賭けるくらいのきわどい話なんです。そのくらい勇気のいることだった。反革命罪とか言われかねないですからね。ただ我々のことを北京に帰してくれって陳情したら、それが逆に認められちゃってね。結局、国務院は地方政府に「お前たちでなんとかしろ」と命じたわけなんです。で、地方政府は地方政府で、「そこまで言うんだったら、お前たちが残った下放青年たちの世話をしろ」と彼らに言うんです。役所にそういう部署を作るからって。それで実はハイシアみたいな親子の再会を、二組か三組、成功させているんですよ。彼は信念として、やっぱり親子が会いたいというなら会わせるべきだと思っただけです。とにかく信念として。

だから、ワン・ウェイ（王偉）っていうのは、いろんな

名前出してごめんなさいね。ワン・ウェイっていうのは農民です。あの冤罪をかけられた農民。そのワンウェイのことも、それからグォ・ジョンミン（郭忠民）というホアン・ユーリンを処罰した共産党の幹部も、教えてくれたのは全部チャオ・グォトンさんですよ。ところがホアン・ユーリンと一緒にチャオ・グォトンさんのところへ行ったら、どうも共産党幹部の方の肩を持つてるわけですね。これはちよっとやりにくくなっただけだと思っただけです。ただやっぱりどうしても再会を実現させたかったわけですね。だからチョウウさんに相当しつこく食い下がって頼んだんです。こう言っただけですよ。「僕は延安でホアン・ユーリンにもワン・ウェイにもしつかりと言いつ分を聞いている。もしこのままグォ・ジョンミンさんが出てこなかったら欠席裁判になりますよ」って。「それでも映画は完成しますよ」って。そして彼は、「そうか、片手落ちになるのか」って言いましたよ。

ここからなんです。ここからが中国人のすごいところ。彼はそのあと動くんです。僕らには内緒で。事前にグォ・ジョンミンの家に行って打ち合わせをしたらいいんですね。言ってみれば、あのもう一つの再会劇の裏側に、一人の出演者の明らかな演出があったというわけなんです。これ『延安の娘』らしい話なんですけどね。まず訪ねて行っ

たら、グォ・ジョンミンさんが白髪の好々爺となって出てくる。孫を抱いて出てきたでしょ。でもあの孫、実は同居していません。呼んだの、家に。それから再会して割と早い段階で、自分の息子が障害を持ってしまい、耳が聞こえなくなっただけで話したでしょ。あれもたぶんチャオ・グォトンが吹き込んだでしょうね。

こう聞くと嫌なやつに聞こえるでしょ？ でも違うんですよ。彼はいつかホアン・ユーリンが北京に戻ってきたときのことを考えていたんです。その時に禍根を残さないようにと。だから喧嘩両成敗じゃないけど痛み分けにしておいて、何とかソフトランディングさせようといろいろやっただけなんです。さらに、これは何とも切ない話なんです。ホアン・ユーリンは全部分かってるんです。騙されてるってことを。騙されたふりをしてるんです。もうあの日は、一日中鳥肌が立ったり、うるうるしっぱなしですね。すごいなあ、すごいなあと思っていましたね。騙すほうも騙されるほうも。それだけやっぱり仲間たちは人の気持ちというのを大切にしていたんですね。

ホアン・ユーリンの激白ですけど、あれは当然あの夜に撮っているんですね。一番重要なインタビューになるわけですから。あれは長辛店の外れの方にある下放仲間の家なんですけど、ホアン・ユーリンの親友の家で、彼は一番信

頼できる人の家に僕らを連れて行ったわけですね。その親友も「おれ、ちょっとぶらぶらしてくるわ」と言つて外に出ていきましたよ。気を利かせてね。それでインタビュ어가始まって。僕は彼に「人間じゃない畜生だ」って言われたときの話を振つたんです。本編の中に二度映像が出る、労働改造で送られたあのダムでのことです。たしかこのインタビュ어의半年くらい前だったかな。あのダムへ行つたときに、僕はホアンさんをお願いしたんです。ここで、かつて「人間じゃない畜生だ」って言われた時のことを話してくれないかって。そしたら彼は「勘弁してくれよ」って言いました。「俺はここで言われたんだぞ、そんなこと言つて終わつたんですけど。それがこのインタビュ어의時は、彼の方からダムの話を切り出したんですよ。それで、あの時はこんなところでしゃべれるかって言つたのが、今日こうして自分の方から話すのは、グオ・ジョンミンという幹部と会つて、長い間、澱のようにたまつていたものが吹っ切れたつていうことですかって聞いたんです。そしてたらグワーつて泣き崩れていった。おそらくあのシーンになるまで、あのホアン・ユーリンつて人はどういうつもりで動いているんだらうつて思つてる人が多いと思うけど、あそこでまあバシッと分かりますよね。面子めづらなんですよ、

面子。ちょっと女性には分かりにくいかもしれないけど、男には面子つてものがあるんです。だからその面子を守るために、ホアンさんは三十年間闘いつづけたということなんです。

それで、ホアン・ユーリンにはその後いくつかエピソードというか後日談があります。

ホアン・ユーリンのエピソードにいく前に、それぞれ登場人物がどうなったか気になりますよね。まずハイシアですが、元気にしてまして、もう家に電話が入りましたから、北京の親ともしょっちゅう電話でやり取りをしているそうです。なんか翌年の春節にも北京に行ったそうですよ。

一つ困ったことが起きたの。ハイシアがね、息子を北京の学校に入れたいって言ひ出したんですよ。見ちゃつたわけですね、北京を。ロケ中も一回マクドナルドのハンバーガーを食べさせたことがあるんだけど、義理のお姉さんは不味いと言つて吐き出したんだけど、ハイシアはおかわりしたからね。きっと北京を食べてるつて感じだったんだろ。うな。私には北京の血が入ってるんだから、北京の食べ物は美味しいに決まつてるつていうような。

彼女はあの旅のあと、ずいぶん自信がついたみたいですよ。ただ、お父さんの方は結局リストラされちゃつたんですよ。だからハイシアの子どもを北京の学校にいかせるの

は無理なんです。お金がかかるから。それでハイシアに諦めさせようとするんだけど、その役目は僕らが負うことになるんです。延安に出かけて行って、「ハイシア、それはちょっと無理だよ」ってね。そしたらハイシアはこう言いました。「わかってる」って。きつと甘えたかったんでしようね。ちょっとお父さんを困らせてやろうかって。そんな感じだったんじゃないでしょうか。

『延安の娘』の完成試写は、一番はじめは北京でやったんです。あれだけプライベートな問題に踏み込みましたからね。やっぱり本人たちの許可を得て公開しないとだめだなと思って。VHSテープを持って、北京と延安に行っただね。映画の中とまったく一緒に、こうメガネをはずして手で拭うような仕草で。

それから延安行ってホアン・ユーリンに観せたんですけど、これがもう何とも切ない話になっちゃいました。

彼に再会したら浮かない顔をしているんですよ。暗く沈みこんだような顔をしている。子どもを連れて来てるから、どうしたのかなって思っていてみても、なかなか答えてくれない。それで試写の前に食事に誘ったんですよ。一杯飲もうかって。そしたらね、なんと奥さんが男つくって逃げちゃったらしいんですよ。子どもを置いてね。しか

も一家の所持金のすべてを持っていかれちゃった。

これ、「女難」っていうんですかね。しかもその男っていうのが僕らもよく知ってる人で、ハイシアが北京に行くときに長老が出てきて問題が解決するでしょ。あの長老の息子なんですよ。なんかいつもね、あの食堂にいたの。何かおかしいなって思ってたんですよ。

だからね、『延安の娘』っていうのは、それくらい狭い人間関係の中で撮っているってことなんです。だからあれだけドラマが続いたんです。撮影が成功した理由のひとつは、これを同級生の物語として描き切ったっていうことだと思えます。ハイシアのことは皆が知っていたからね。だけど、その存在はずっと触れてはいけないこととして続いていた。それがハイシアの登場によって一気に火がついたわけですね。

ホアン・ユーリンの話に戻すと、「それじゃあ試写はやめましょう。奥さんも出てくるし、息子の手前、まずいでしょ」って僕は言ったんです。そしたらね、子どもにも観せるっていうんですよ。観せて現実をわからせるんだって。それがホアン・ユーリンですね。それで試写がはじまって。彼は最後に自分が激白するシーンを観て泣きましたよ。それから僕に、このテープを下放先で世話になった村人たちに観せにいくって言いました。きつと『延安の

娘』という映画の主役を張った自分を観て、少し自信を取り戻してくれたんでしょね。僕らにとっては最高の褒め言葉でした。「これ、ちよつと昔の仲間に見せてくるわ」って言ってくれてね。たぶんワン・ウェイにも観せたんじゃないかなあ。きつと二人であれこれ話したと思います。

ワン・ウェイとホアン・ユーリンっていうのは、同じ時期に同じ罪で同じ労働改造所に入れられてるんですよ。しかも同じ幹部に刺されてね。だからこそホアン・ユーリンはワン・ウェイのことを何とかしようとがんばったわけです。ワン・ウェイは僕が初めて会ったとき、まだ村人から「強姦魔」って言われていたからね。僕は彼から何て言われたと思います。「お前を三十年、待った」って言われましたよ。鳥肌立ちましたよ、その時。彼は何度も何度も訴訟を起こそうとしてただけど、その入り口の段階でもう全部だめでね。ただ僕らも、初めはワン・ウェイのその過去を奥さんが知ってるかどうかともわからないわけですよ。だから最初の年は村の外に連れだしてインタビューしてたの。そうしたら次の年になって、ホアン・ユーリンが村人の家で話し込んでいたら、ふらつとワン・ウェイが入ってきた。「なんだ、来てたのか」って感じでね。あれはたぶん、部屋の中にマイクの竿が立っているのに気づいてやってきたんですよ。

これだからロケっていうのはおもしろいんだよね。ワン・ウェイからすれば「ちよつと俺のこと忘れてないかい？」って感じだと思っんですよ。で、来ちゃった。

じつは僕は、ワン・ウェイのことをホアン・ユーリンに背負ってもらおうつもりだったんですよ。ワン・ウェイのことも引き受けてくれないかって。ところが、その前にワン・ウェイの方から来ちゃったということです。で、そうになると、さっき言ったように、同じ時期に同じ幹部から同じ罪で刺されて労働改造所に入れられたわけです。自然とああいう風に、ワン・ウェイのことを背負わなきゃいけないみたいな感じになってしまった。もちろん偶然ですがね。結局、ワン・ウェイの方から来ちゃったから、僕らも堂々と彼を村の中で撮るようになってね。したら、あのおかあちゃんが出てくるわけです。林檎の木を剪定しながら、この人の無念を晴らしてやってくれっていう。ああ、よかったなと思いましたね、ワン・ウェイには少なくともこの奥さんがいるんだと。あの二人は再婚同士なんですけど、まあ、いろんなドラマがあったと思うけど、この人の無念を晴らしてやりたい。そうでなきゃ、この人は死んでも死にきれない。何とかしてやりたい。僕なんかは甘ちゃんだから、あの林檎の剪定のシーンを明日への希望みたいな気分で撮るわけです。だけど中国のリアリズム

ムっていうのはそんなことを許してくれないんだなあ。もう一枚その上に乗っかってくる現実とかリアリティっていうのがあるわけですよ。それをきちんと丹念に拾い上げていくっていうのが、ドキュメンタリーを面白くしていくことなんでしょね。

ホアン・ユーリンの話にまた戻しますけど、彼は別れ際に、「二年待つてくれ、二年待つてくれれば、俺は大丈夫だから」って僕に言いました。たしか今は広州にいると思います。前妻との間に生まれた娘がいて、そこに身を寄せたんですね。彼のあだ名は「八戒」っていうんですよ。猪八戒。いい男なのに、八戒じゃちょっとかわいそうだね。あだ名はもう一つあって、「黄色い風」。これは彼が紅衛兵のリーダーとして暴れまくっている時につけられたものです。また会いたいですね、ホアン・ユーリンに。まあ、行けば会えるんだけどね。

彼にはちよつといひ話もあるんです。このままじゃあまりにも救われないからお話しすることにしましょう。

ドキュメンタリーっていうのは、女性が出てくると俄然面白くなるんですが、あの同級生のおばちゃんたち。まあ、よくしゃべるあの人たちね。なんかワン・ルーチョンにひどいこと言っちゃったよ。もう顔なんてどうでもいい」とか。まあ、えげつないというか、かましいとい

うか。だけど、あったかいですよ。そもそも『延安の娘』っていうのはお節介の話ですからね。壮大なお節介の話。だけど、それがいいですよ。ああいうちゃんとしたお節介があれば、一人暮らしのお年寄りが孤独死なんてしなくてすむんじゃないかな。ちゃんと相手の懐に入っていく。というか、とにかく人に触れるってことですよ。

そうそう、同窓会がありましたよ。また脱線しますけど。あの同窓会でハイシアが歌った歌、じつは台湾のテレビドラマで大ヒットした曲で、中国人ならだれでも知っている曲ですよ。よりによってあの歌を選ぶなんてね、ハイシアも罪なことするなあと思いましたよ。だってそうでしょ？ 親父の横でね、ドキッとしますよ。だけどね、ハイシアはやっぱり殴り込みみたいな気分だったんだと思うよ。延安出る時にはね。だって養父母と縁切ってもいいって言って延安を出たんだから。ひよつとしたら父親の夫婦仲が悪くなるかもしれない。家庭を壊すことになるかもしれない。それでも私は北京に、っていう気持ちだったわけですからね。まあだけど、ワン・ルーチョンの奥さんがいい人だね。あそこの夫婦は再婚同士なんですけど、あのネックレスね、奥さんの弟がマカオで買ってきてくれた結婚祝いなんです。それをハイシアにあげたんだよね。まあ、でも結婚する前に言わなかったっていうのは、確かに

ひどい話ですけどね。

何の話でしたっけ？ ホアン・ユーリンのもう一ついい話でしたね。そのお節介のおばちゃんたちが同窓会で、「そろそろホアン・ユーリンに会ってあげなさいよ」って昔の彼女に言ったわけですよ。それで長辛店のダムの畔かなんかで会ったわけ。この人よっぽどダムに縁があるんだね。でも、さすがに僕らには教えてくれなかった。だからそのシーンは撮れてないんです。で、ホアン・ユーリンは何を言っているのかわからなかったそうです。ドキドキだったのでしょうからね。

じつはホアン・ユーリンは、二つの意味で彼女に申し訳ないことをしたと思ってた。一つは、中絶という辛い思いをさせたこと。もう一つは、ホアン・ユーリンが五年に及ぶ労働改造を終えて村に帰ってきた時、彼女はその村で待っていたんです。でね、そのころはもう文革も後期に入り、恋愛の取り締まりも少し緩くなっていて、半年くらい一緒に暮らしたそうです。だけど、一回も抱けなかったって。怖くてね。また妊娠させてしまうのではないかと。それで、半年くらいたってね、やっぱり駄目だと。「俺は反革命罪だ。そんな男と一緒に居てはいけない」と言って、彼女を北京に帰しちゃうんですよ。その頃、反革命罪は一生付きまとうと考えられていましたからね。

その彼女と三十年ぶりに再会した。すると彼女の方から先に「ごめんね」って言ってきたんだって。さあ、どういう意味なんでしょうね。ごめんねって。あんたは帰れって言ったけど、やっぱり残ってればよかった、という意味なのか、それとも……。でも、きつとそうじゃなくて、長い時間が経ったわね。二人ともすいぶん歳を取ったわね、っていうような互いを労る言葉だったんじゃないでしょうか。それを聞いてホアン・ユーリンは、いっぺんで心が晴れたそうです。もうこれで自分の名誉は回復した。だって当事者だった彼女が許してくれたんだからと。ずっと苦しんできた「人間なのか畜生なのか」という自分に向けた問いに對しても、もうこれでやましいことは何もない、と思えたそうです。だから本当はあのグォ・ジョンミンという幹部に会う必要はなくなっていたんですね。自分のことだけ考えれば。でも、ワン・ウェイのためには、っていうことだったんですね。と、まあ、こういう風にして、もつともつとドラマがあつたつてことは理解していただけたんじゃないかと。

もう一つ番外編のエピソードがあります。僕とずっと一緒にやってきた通訳で、大谷龍二っていうのがいるんですよ。これは日中学校っていうところで、中国語を勉強して、文革時代のテキストで中国語を習ったっていう男なん

ですね。だから革命歌が歌えるんです。それで下放青年たちから、お前は日本人には思えないってバンバン好かれたわけです。彼の通訳は心を掴むというかね。言葉を伝えるだけじゃないんですよ。心を伝える。この大谷がいなければ『延安の娘』の完成はありえなかった。

で、前にも言ったようにこの映画にはチャオ・グオトンというキーパーソンがいます。僕は用がなくても毎日のように彼の家に押しかけているわけです。そしたらある時ね、大谷がなんか通訳しないんですよ。僕が「真面目にやってくれよ」って言ったたら、「いやあ、ちょっと困ってるんだよ」って答えた。それで「どうしたの」って聞いたら、「じつは、もう仕事はいいから見合いをしろって言われたんだ」って真顔で答えるんです。いやあ、たまげましたね。それでね、マジで見合いして結婚しちゃったのよ。いま北京に住んでいますよ。ホントに。だから、そのくらい大谷は気に入られちゃったんですね。こういうような強力なスタッフがいて『延安の娘』はできたんです。

その後、僕は『蟻の兵隊』という旧日本兵のドキュメンタリーを撮ることになります。これもすごい話で、終戦になっても戦争をつづけていた日本軍部隊があったという話です。軍の命令で中国の山西省に二六〇〇人余りの日本兵が残留させられて、国民党の部隊として共産党軍と戦っ

た。つまり国共内戦を戦ったわけです。それで戦後の戦闘で、五五〇人余りが戦死してるんですよ。知らなかったでしょ？とところが、彼らは日本政府から、戦ったのは日本兵としてではなかった。自ら志願した義勇兵としてだったと切り捨てられてしまったんです。要するに、なかったことにしよう。で、その兵隊さんたちが、齢八十になって国を相手に裁判をやって、自分たちが日本兵として戦ったことを認めてほしいと訴えていたんですよ。そのひとり、奥村和一さんを主人公にした映画が『蟻の兵隊』です。

この映画は、小泉純一郎元首相が靖国神社を公式参拝した二〇〇六年の夏に封切られたんですが、ちょっとした社会現象になるぐらい大ヒットしました。渋谷のミニシアターで十一週ものロングランを達成したんですよ。それも一日に八回くらい上映してね。

あ、誤解のないように言っときますけど、じゃあそれで潤ったかというとなんかそうじゃない。ドキュメンタリーは儲かりませんから。うちはかみさんと二人で映画製作をやってるんですけど、あの時はかみさんがどこからか工面して一千万円だったんですよ。ところがそれと引き換えに離婚届を突き付けられた。もしこれで当たらなかつたら別れようってね。それら必死になるよね。まあそんなもんですよ。映画をつくってる連中っていうのは。

最後に、この話だけはしたいんですけど。今、震災後の陸前高田を舞台に映画を撮っています。佐藤直志さんという樵のお爺さんが主人公で、タイトルは『先祖になる』。東京から車で通ってるんですけど、往復の走行距離が五万キロを超えました。一往復千キロだから、五十回くらい通ったことになるかな。

じつは昨日、最初の編集が終わって、自分でいうのもなんだけど、これがなかなかいいんですよ。単なる震災映画の枠を超えた、人間の記録そのものとしてね。主人公の直志さんは七七歳なんですけど、とてもパワフルな人でね。千年に一度といわれる大津波で家を壊され、消防団員の息子さんは歩けないお婆さんを背負って逃げる途中、波にのまれてしまっんです。でも、負けない。まだ息子さんの遺体が見つかる前から、今年も米作りをすることを決め、がれきの上にソバの種を撒いた。そして、ついに元の場所に家を建て直すことを決意する。樵だから建材はみずから森に入って木を伐るんですね。津波で枯れた杉を。彼の思いは、自分が生きているうちに町が再生するのを見るのは不可能だけど、何十年かしたら再び元の町に戻るだろう。よし、自分はその礎になろうということなんです。それでタイトルは『先祖になる』。

直志さんを見てみると、僕ら都会に住む人間がいつのま

にか忘れてしまった、人間が生きていくうえで大切な何かがたくさん詰まっている。どんな災害も人間の豊かな心を屈服させることはできないんだと僕は思いました。

震災後、なんか日本全体が元気ないじゃないですか。先行きが見えない不安というかね。やっぱり元気になってもraitたいですよ。被災地の人だけじゃなく、日本全体がね。そんな映画になると思います。

そろそろ時間がきたようですね。長い時間お付き合いいただき、ありがとうございました。